

舞踊の可能性と課題—教育として・芸術として—

The Possibilities and Problems of Dance-As Education and as Art-

1K07B118-3

仙田 麻菜

指導教員 主査 杉山 千鶴先生 副査 寒川 恒夫先生

【本研究の目的及び方法】

舞踊を通じた様々な経験から筆者は、舞踊には運動教育的側面と芸術教育的側面という特性があるのではないかと考える。現行の学習指導要領(2008)においては、その学習内容から舞踊の2側面の実現が認められる。しかしその一方で、それが内包する教育的焦点の曖昧さや舞踊の教育的価値の揺らぎといった問題が現状に挙げられる。

以上から本研究では、身体運動の教育により価値がおかれた学校ダンスと、芸術的特性が強調された劇場ダンスという例をとりあげ、これらが舞踊の2側面を保障すべきであるにもかかわらず、それが容易にかなえられていない現状を検討する。そして、それぞれの発展の可能性を両領域の共有に見出し、今日の舞踊の在り方をその本質から考えることを目的とする。

【考察】

1. 舞踊の運動教育的側面と芸術教育的側面

運動教育的側面を強く主張した学校ダンスには、身体運動を通じた人格形成がその特性に挙げられる。一方、芸術教育的側面を強調した劇場ダンスには、作品の創造やその表現の発露・享受を通じた自己の更新という特性が挙げられる。これらの両概念には、例えば学校ダンスが教育領域において、劇場ダンスが芸術領域において論じられているということが示しているように、まったく異なった知見や機能が社会から与えられているように思われる。

2. 学校ダンスの歴史的変遷と現状

学校ダンスが導入された歴史を振り返ると、1913(大正2)年に制定された学校体操教授要目では、現行学校ダンスの学習教材とされる創作ダンスとフォークダンスの基盤が「發表的動作ヲ主トスル遊戲・行進ヲ主トスル遊戲」の制定にみられる。その後は、「体力や生涯スポーツ、楽しい体育論」といった観点から体育科のあり方が見直され、学校ダンスもその影響を強く受けていると考えられる。なかでも学校ダンスの必修化は、その大きな転換期になったといえる。しかしながら、教授方法が教師によって異なったり運動的側面の保障が優先されたりといった現状も見逃すことはできない。

3. 劇場ダンスの歴史的な性格と現状

他方、多様な芸術領域と関わりをもつ劇場ダンスには、身体のみならず音楽や美術を内包した先に表出される作品の表現という次元を目指すという特性が挙げられる。イソドラ・ダンカンやルース・セント・デニス、マーサ・グレアムらが提示した様式から自由になる新たな舞踊は今日のコンテンポラリーダンスにまで発展してきている。劇場ダンスの課題は、舞踊家が小・中学生を対象としたワークショップを行っているにもかかわらず、それが学習指導内容を十分には満たしていないという点で、その教育的価値の低さが挙げられる。

【結論】

以上の特性の違いや前述した社会的認識の違い、さらにはそれぞれの良さの発揮を阻害する現状が、同じ舞踊を素材としながらもその社会的役割は全く相いれない形で成立している両領域間にさらなる溝を生ませているのではないだろうか。今後は、この溝を埋める努力を我々には期待されているのではないだろうか。

確かに、学校ダンスが教育領域において、劇場ダンスが芸術領域において扱われることは、それらが果たす社会的機能の結果であるようにも思われる。学校ダンスは学習指導要領により定期的に改訂されているが、その根本の学習教材の教育的意義に変化がみられないことから、もはや限界が見えてきているように思われる。一方の劇場ダンスは、社会からその教育的価値が求められることは未だわずかでしかないように思われる。こうした現状が、学校ダンスと劇場ダンスの両特性・両側面が等しく保障されるべきだという主張を覆い隠しているように思われる。ここに、舞踊を一側面からしか捉えていなかったり、固有の特性ばかりに固守していたりという今までの反省がある。舞踊の本質である2側面を再度理解したところで、各領域のさらなる発展の可能性はお互いの特性によって補うことができること、すなわち領域共有が提案されたい。このことこそ、舞踊を本質的に捉え、それが社会的価値を有して今後も在り続けることができる主張だと信じている。